【シンポジウム「北朝鮮の経済と貿易」】

三村報告「ロシアやモンゴル等との貿易・交流」へのコメント

インドネシアと北朝鮮の関係——歴史と政治

本　名　　純

はじめに

2020年はインドネシアにとって独立から75周年という節目の年に当たる。独立記念日は8月17日であるが，独立記念式典に合わせて各国の首脳から祝賀メッセージが届いた。北朝鮮からも金正恩からの祝電が届いており，そのなかで金正恩はインドネシアが非同盟で社会の繁栄を達成してきたことへの賛美と，今後の両国の友好関係をアピールした(1)。真偽の程は定かではないが，彼が他国の独立記念日に祝電を送るということはあまりないとのことである。もしそうであれば，彼にとって，インドネシアは重要な友好国であるという認識の表れだと理解できよう。特に現在のジョコ・ウィドド政権（2014年〜）を重視しているとも考えられる。なぜか。それは，ウィドド政権下の実質的な権力者であるメガワティ元大統領（闘争民主党党首）と北朝鮮の関係が前提にあり，もっと遡れば，メガワティの父親であり「国家独立の父」でもあるスカルノ元大統領と北朝鮮の金日成との関係にもつながってくる。その歴史を概観しつつ，インドネシアの国内政治の文脈から，対北朝鮮外交の持つ意味を考えてみたい。

スカルノと北朝鮮

両国の国交が結ばれたのが1961年。国際的に孤立しつつあるスカルノ大統領は1964年に平壌を訪問して金日成との友好をアピールした。翌年1月には，スカルノはインドネシアの国連脱退を宣言し，「第二の国連」を目指すとして

「新興勢力会議」（CONEFO）を立ち上げた。北朝鮮はベトナムや中国と並んでCONEFOに参加することを決め，同年，金日成はインドネシアを訪問する。ジャカルタ近郊のボゴール植物園でみた花に興味を持った金日成に対して，スカルノは，その花（デンドロビウムの一種）を「金日成花」と名付け，両国の友好のシンボルにすることを決めた。

スカルノにとって，国際的に孤立を深めるなかで，自分に会いに来てくれた金日成への思いは特別だったに違いない。しかし同年，スカルノは失脚し，国内の実権は陸軍将校のスハルトに移っていく。そのスハルトは，1966年に大統領代行となり，これまでのスカルノの外交路線を180度転換し，反共・親米路線を掲げ，CONEFOも会議が実現する前に解散を決めた。

それからの30年間，スハルト独裁体制が続き，北朝鮮との関係も国交はあるものの，冷え込んでいく一方となった。金日成からすれば，「親友スカルノ」を追い落としたスハルトとの友好など考えにくかったであろうし，スハルト政権にとっても開発独裁体制の構築と発展に，日米の強力は不可欠であっても北朝鮮に対する優先度はかなり低かったといえよう。

メガワティと北朝鮮

両国関係が再び活性化し始めるのが2001年以降である。つまりスハルト体制の崩壊（1998年）があり，民主化が進み，メガワティ闘争民主党党首が大統領になった年である。北朝鮮のほうも金日成から金正日の世代になっており，両国とも第2世代の時代に突入していた。メガワティ大統領は，2002年3月に平壌を訪問し，金正日と会って親の時代からの友好関係を再確認している。当時の国際情勢は北朝鮮に厳しく，ちょうど米国のブッシュ大統領が「悪の枢軸」発言をして，北朝鮮への圧力を強めた時であった。そのタイミングでのメガワティの訪朝である。1964年にスカルノが国際的に孤立したときに金日成が訪イしてくれたことを記憶する外交官たちにとっては，メガワティの2002年訪朝は，「お返し」のように受け止められたという。ただ，スカルノの血を引くメガワティの政権期間中に，金正日が訪イすることはなかった。メガワティ政権が短命すぎたからかもしれない。2004年の大統領選挙でユドヨノ退役中将に敗北したメガワティは，政権からは降りるものの，野党第一党のリーダーとして政治の舞台には残った。

ユドヨノ政権下（2004～2014年）では，さすがに金正日もインドネシアに来なかった。とはいえ，金永南（最高人民会議常任委員会委員長）がインドネシアとの窓口になった。2005年にバンドンで開催されたアジア・アフリカ首脳会議（バンドン会議）50周年記念式典には，金永南が参加している。また第2次ユドヨノ政権下の2012年にも金永南はジャカルタを訪れ，ユドヨノ大統領と会っている。

第３世代の外交関係

このユドヨノ時代には，両国関係に大きな進展は見られなかったものの，現在のウィドド政権になってから，インドネシアの北朝鮮外交は再活性化していく。大統領自身には北朝鮮へのコミットメントはほぼないと思われるが，上述のように，この政権の屋台骨は闘争民主党であり，実質的な最高権力者はメガワティ党首である。政権発足後，すぐにメガワティの妹（つまり同じくスカルノの娘）であるラフマワティが訪朝する。彼女は「スカルノ教育財団」の会長であり，訪朝は金正恩に「スカルノの星賞」を授与するためだった。ラフマワティは，彼が朝鮮半島の平和に大きく貢献してきたと絶賛した(2)。

さらに興味深いことに，メガワティの娘であるプアン（闘争民主党政治家）も北朝鮮外交で役割を果たすようになっている。つまりスカルノ家の「第3世代」であり，相手も金正恩という第３世代である。プアンは，ジョコウィ第1次政権で調整大臣（人材開発・文化問題担当）に抜擢され，その大臣時代に大統領特使として2018年7月に平壌を訪問した。金永南と会談し，翌月のアジア競技大会（アジア大会）に金正恩を招待した。

この外交タイミングも興味深い。ちょうど米国のポンペオ国務長官がシンガポールでASEANの外相たちに，北朝鮮への制裁強化をアピールした直後のタイミングである。先のメガワティも，この時のプアンも，米国のアジア戦略を配慮する気配を全く見せていない。むしろ，北朝鮮に対して地域で連携して圧力を強めようというアピールがされるごとに，インドネシアは逆の外交を展開しているかにも見て取れる。それは何を意味するのか。その答えに迫る前に，もう少し，ジョコウィ政権下での北朝鮮との関係を見ておこう。

北朝鮮に対して国連の制裁が2017年に課せられたが，ジョコウィ政権は二国間貿易を発展させようとしてきた。2018年には300万ドル相当の石炭を北朝

鮮籍の船がインドネシアに持ち込み，インドネシア政府が一旦は取り押さえたものの，石炭の取引は停止されなかった。また，2020年3月，平壌駐在のインドネシア大使は，Suara Indonesiaという海外にいるインドネシア人向けのラジオ（英語でいうところのVoice of Indonesia）で，北朝鮮に対して国際社会は制裁の緩和に向かうべきだとし，二国間の貿易も進めていく準備をしていると説明した。国連制裁というハードルがあるものの，今こそインドネシア企業が平壌に来て新しい貿易を開拓する時であり，大使館も積極的に商談をバックアップすると訴えた。

インドネシア大使の話では，北朝鮮にはインドネシアの食品や洗剤などが結構入ってきており，市民に人気だという。そういう背景があり，大使館でも2019年からインドネシア製品のギャラリーを館内に設置して，積極的なプロモーションを開始したとのことである。

もちろん大使は，現在の両国間の貿易は直接的な貿易ではなく第三国で第三者経由に限定されているとしつつも，今後の積極的なビジネス交流を訴えた。インドネシア商業省のデータによると，2019年に北朝鮮への製品輸出は大きく伸びている。額でいえば，2019年に300万ドル強で，国連制裁が効いた2018年の93万ドルと比べれば約3倍の伸びである。2015年には260万ドルほどであり，その規模より上回っている。北朝鮮からの輸入は2016年の550万ドルから2018年には3万3000ドルに落ち，2019年はちょっと上がって20万ドルに留まっている。北朝鮮からの輸入は鉱物，化学製品，フィラメント電球，半導体などが主だという。

メガワティが背後にいるウィドド政権の任期中に，彼女は父親のレガシーである北朝鮮との関係を，彼女の手で一歩前進させたいと考えていると闘争民主党内の幹部は指摘する。大使も，その要求を理解しており，新しいインドネシアと北朝鮮の関係のシンボルにある契機を探しているとのことである。その関連で，現在インドネシア大使館が模索しているプロジェクトの一つが北朝鮮「地ビール」の大同江ビールを輸入して，オセアニア地域の販売ハブになるというビジョンである。また，スカルノ時代に「金日成花」が両国のシンボルとなったように，朝鮮虎とオラウータンの交換も盛んに行って，トラとサルとで新時代の友好シンボルにするというアイディアも出ている。

いずれにせよ，北朝鮮との関係を深めていこうというモチベーションが今のジョコウィ政権の中核のところで強まっており，敵対や孤立といった外交は眼

中にないといえよう。それがいかに強いかというのが，「アイシャ事件」でも露呈された。この有名な事件は，2017年にマレーシアでの金正男暗殺工作で，インドネシア人女性のアイシャが，テレビの「どっきり企画」を手伝うという嘘で騙されて暗殺に加担した事件である。もう一人の加担者に仕立てられたベトナム人女性のほうは，ベトナム政府が自国民を巻き添えにした北朝鮮に対して強く抗議した。だがインドネシア政府はずっと静観し，北朝鮮に公にクレームすることはなかった。このベトナムとの正反対の態度からは，いかにジャカルタが平壌との関係に気を使っているかがわかる。

おわりに

なぜインドネシアは，このような北朝鮮外交を展開してきたのか。もちろん一般的な説明されるような歴史的な関係や個人の思い入れという側面もあろう。しかし，今や「ミドルパワー」となったインドネシアの国家としての自信が反映されているようにも思える。国連の制裁が続き，対北朝鮮外交が世界的に冷え込むなか，インドネシアは逆に外交関係の強化を展開できるということを示すことで，大国間の綱引きのなかで埋没してしまう他のASEAN諸国と違って，地域のミドルパワーとしての存在をアピールしたいというナショナリズムが働いていると思われる。

特に現在，米中対立で東南アジアが超大国の草刈場になっている地政学的な現実を考えると，「独自路線を取れる」という戦略アイデンティティは，ミドルパワーを自負し始めたインドネシアのナショナリズムを満たすものになっている。インドネシアの北朝鮮外交は，そういう現代的なナショナリズムが多分に反映されていよう。それは，非同盟運動とかASEAN中心性といった制度や規範の視点からは見えてこない国内の力学であり，今後もインドネシアの北朝鮮外交の方向を理解する上で重要な側面となろう。

注

(1) https://www.kompas.tv/article/102176/kim-jong-un-ucapkan-selamat-hari-kemerdekaan-indonesia-ini-harapannya（2021年2月5日アクセス確認）

(2) https://www.merdeka.com/dunia/yayasan-pendidikan-soekarno-akan-beri-penghargaan-kepada-kim-jong-un.html（2021年2月5日アクセス確認）